



関係者に質問し回答を聞く学生たち(右)

信大生12人 6次産業化の成功例 「松本一本ねぎ」に学ぶ

信大経済学部(松本市)の遠藤幹夫教授のゼミ学生12人が8日、伝統野菜「松本一本ねぎ」の畑や、ネギを使ったギョーザの製造工場などを見学し、関係者に取り組みを学んだ。生産から加工、商品化まで一貫させた6次産業化の成功例を学び、課題の解決法を探るのが目的という。

(八代けい子)

見学後にJ A松本市の南部事業所で、熊谷吉孝組合長、同J Aねぎ部会長で松本一本ねぎ採取組組長の青木秀夫さん(筑摩2)、ギョーザ製造卸販売の信栄食品(並柳4)の神倉藤男社長らに話を聞いた。

「気を付けていることや、うまくいかないことは？」という学生の質問に、青木さんは「一本ねぎを全国の人に食べてほしいと信栄食品と連携し、うまくいった。」

神倉社長は九条、下仁田など全国に有名なネギがある中、ステッカーのデザインなどで「どこにもないもの」ということを伝えたとし、「農家も高齢化し、世代交代の時期。農業をしたい人が増えるよう、農家の希望価格で

買えるかが課題」などと話した。

「コロナ禍の中で、どういふ食品の売り上げが伸びたか？」との質問には、神倉社長が「冷凍食品。家まで届けるECサイトでの販売は、前月比150%ずつアップした。今後の柱の一つになる」と答えた。

ゼミ長で、公務員を目指しているという3年生の羽生輝さん(21)は「地域活性化につながる取り組みが、将来の参考になる」。遠藤教授は「農産物はストーリー性がないと、買う側に付加価値を感じさせない」などと解説した。